



日常のあわい

2021年4月29日(木・祝)
～9月26日(日)

展覧会名	日常のあわい
会期	2021年4月29日(木・祝)～9月26日(日)
休場日	毎週月曜日(ただし5月3日、8月9日、9月20日は開場) 5月6日、8月10日、9月21日
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで) ※観覧券販売は閉場の30分前まで
会場	金沢21世紀美術館 展示室7～12・14
料金	一般 1,200円(1,000円) / 大学生 800円(600円) 小中高生 400円(300円) / 65歳以上の方 1,000円 ※()内は団体料金(20名以上)およびウェブチケット料金 ※本展観覧券で入場当日に限り、同時開催中のコレクション展「スケールズ」(2020年10月17日～2021年5月9日)および「Inner Cosmology」(2021年5月29日～11月3日)にもご入場いただけます。
日付指定ウェブチケット購入開始日	2021年4月1日(木)10:00～
日付指定ウェブチケット購入方法	当館ウェブサイト(https://www.kanazawa21.jp)よりご購入いただけます。
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800

本資料に関する
お問合せ

金沢21世紀美術館 事業担当: 山下樹里・横山由季子
広報担当: 石川聡子・齊藤千絵・落合博晃
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<https://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会概要

2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症の流行は、発生から1年以上がたった現在も収束の兆しが見えないままです。世界中で人々の日常はすっかりその姿を変えてしまいましたが、日本はもとより地震や台風などの自然災害が多く、いつ日常が脅かされるかもしれない不安や緊張と隣り合わせで過ごしてきた人も多いでしょう。

本展覧会は、私たちが意識せざるをえなくなった「日常」について、今一度見つめ直すものです。そもそも日常を日常たらしめているものは何でしょうか。生活の中のちょっとした習慣や日課、家族や地域の中で共有されている約束ごと。とりたてて変化のない時間の流れや風景。しかしながら、当たり前前に繰り返されている営みであっても、人によって、家族によって、異なる個々の日常が紡がれています。本展では、意識しないと見過ごしてしまう生活のなかのささやかな創造行為に着目した作品や、突然の喪失や災害に向き合う心の機微を捉えた作品、そして形を変えて続いていく日常をあらわにする作品を介して、日常と非日常のあわいにある「現在」を浮かび上がらせます。



岩崎貴宏《アウト・オブ・ディスオーダー（コニーアイランド）》2012年
個人蔵 ©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY



下道基行《ははのふた》2012年
作家蔵

展覧会の特徴

「日常」と「非日常」のあわいにある「現在」を見つめる展覧会

新型コロナウイルス感染症の世界的流行や、地震や台風などの自然災害をはじめとするさまざまな出来事により、私たちが慣れ親しんだ暮らしや風景は刻々と姿を変えています。変容していく日々においても変わらずに発揮される人々の創造性や、変化の渦中で揺れ動く心の機微、変化の中にあっても受け継がれていくものを捉えた作品を通じて、「日常」と「非日常」のあわいにある「現在」を見つめ直す展覧会です。

7組11名の日本人作家を一部屋一作家・ユニットごとに紹介

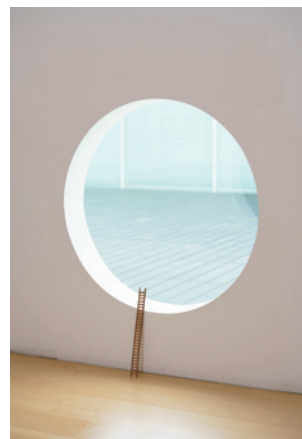
本展では青木陵子+伊藤存、岩崎貴宏、小森はるか+瀬尾夏美、小山田徹+小山田香月、下道基行、高田安規子・政子、竹村京ら7組11名の日本人作家による作品をご紹介します。当館の小ささまざまな展示室を舞台に、一部屋一作家・ユニットごとに展示を構成、それぞれの魅力を存分にご覧頂けるとともに、異なる作家同士のゆるやかなつながりも見どころです。本展のためにコロナ禍で制作された新作にもご注目ください。

若手から中堅、ベテランまで、個々の日常を多様なメディアで表現

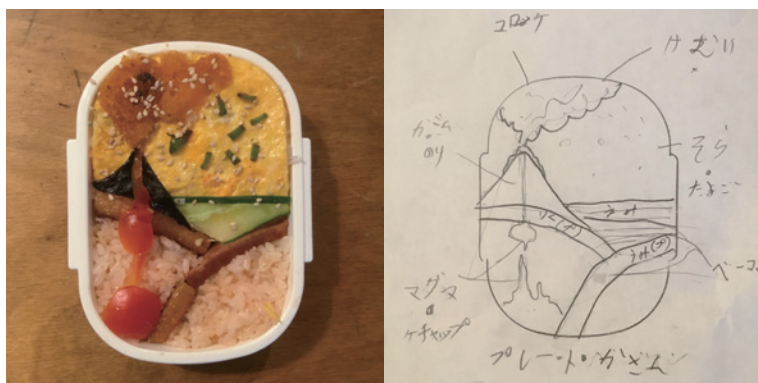
1980年代生まれの若手から、1970年代生まれの中堅、1960年代生まれのベテラン作家までが参加し、個々の日常や誰にでも起こる出来事を、写真や映像、彫刻、ドローイング、刺繍、絵や言葉などの多様なメディアによって表現します。出品作家は大都市だけでなく、国内のさまざまな地域を拠点としており、日々の暮らしと創作行為が密接につながっています。



青木陵子+伊藤存「変化する自由分子のWORKSHOP」展（ワタリウム美術館、2020年）より



高田安規子・政子《A Ladder (Ruler I)》2019年
作家蔵 撮影：長塚秀人



小山田徹+小山田香月《お父ちゃん弁当》2017年
作家蔵

出品作家
(アルファベット順)

青木陵子+伊藤存

岩崎貴宏

小森はるか+瀬尾夏美

小山田徹+小山田香月

下道基行

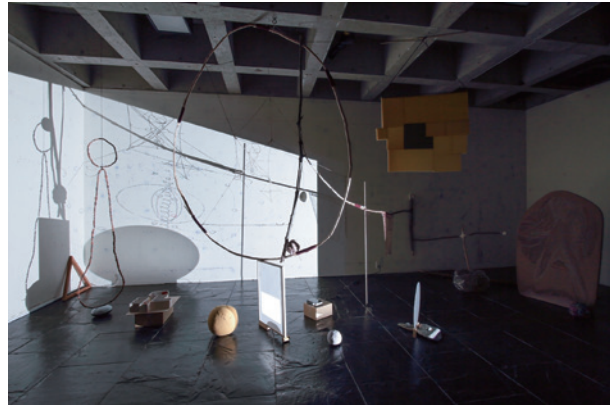
高田安規子・政子

竹村京

出品作家解説

青木陵子+伊藤存

青木（1973年兵庫県生まれ）は主に動植物をモチーフとした複数のドローイングを組み合わせた作品を、伊藤（1971年大阪府生まれ）は連鎖するさまざまなイメージを刺繍の線で描いた作品を中心に制作する。連名での活動の際には、それぞれの作品をゆるやかにつなぎ合わせつつ、展示空間での即興的な造形や人の成長をテーマとしたアニメーションの連作などによるインスタレーション作品を発表。本展では、2017年から参加しているリボンアート・フェスティバルでの制作を元に、編み物や園芸など人々の暮らしに根付く「つくる」という行為の可能性を引き出す作品を展開する。



青木陵子+伊藤存「変化する自由分子のWORKSHOP」展示風景、ワタリウム美術館、2020年
撮影：今井紀彰

岩崎貴宏

1975年広島県生まれ。歴史的建造物や鉄塔、クレーンなどがもつ現実のスケールを縮小し、質感や強度の異なる素材へと置き換えることで、見る者の認識を揺さぶるような作品で知られる。本展では、「誰が袖図」をモチーフにした新作などを通じて、コロナ禍で変化した日常を示唆すると同時に、壊れた厳島神社の実像と鏡像を檜材により組み上げた《リフレクション・モデル（テセウスの船）》により、変化を受け入れながら続いていく日常の姿を浮かび上がらせる。



岩崎貴宏《リフレクション・モデル（テセウスの船）》2017年
金沢21世紀美術館蔵 ©Takahiro Iwasaki, Courtesy of ANOMALY

小森はるか+瀬尾夏美

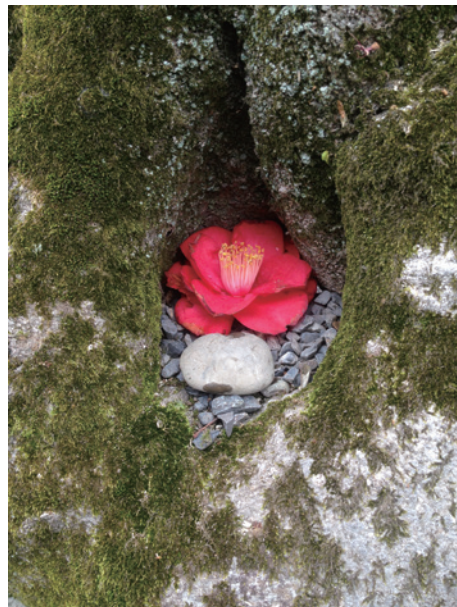
映像作家の小森（1989年静岡県生まれ）と、絵や文章で表現活動をする瀬尾（1988年東京都生まれ）は、東日本大震災を機にアーティストユニットとしての活動を開始。陸前高田から仙台へと拠点を移しながら、東北の風景の変化を見つめ、そこに暮らす人々の語りに耳を傾け、それを記録し、伝える作品を制作してきた。本展では、「震災後、オリンピック前」と「コロナ禍」における東京の若者たちのリアルな声を捉えた映像と、瀬尾の言葉と絵、そしてコロナ禍の年表で構成される作品を発表する。



小森はるか+瀬尾夏美《みえる世界がちいさくなった》2020年
撮影：リョウイチ・カワジリ 提供：札幌文化芸術交流センター SCARTS

小山田徹+小山田香月

1961年鹿児島県生まれ。大学在学中に結成した「ダムタイプ」で1984年から2000年まで活動する傍ら、90年代からは人々が集い対話し、関係性を築く共有空間を多数開発してきた。小山田が重視するのは、集まった人の工夫で、現場にあるものを活用するブリコラージュの手法である。本展では、小山田が日々、家族とともに実践しているブリコラージュ的活動から、娘の小山田香月とのコラボレーションで生まれた《おとうちゃん弁当》、《巡礼ゴッコ》などを紹介する。



小山田徹《巡礼ゴッコ》2015年 作家蔵

下道基行

1978年岡山県生まれ。戦争の遺構や津波で流れ着いた巨石、街なかの細い水路や側溝にかける橋のようなものなど、日常の中で埋もれている異質のものに着目し、リサーチを重ね、写真や映像、文章などで発表する。本展では、義母が手近なものを蓋として代用する行為を追った《ははのふた》や、各家庭の中で欠けているものを、別のもので補っている事象について、中学生にリサーチしてもらった《14歳と凹と凸》を中心に、日常の中で意識されていない異質な風景や、人々が無意識に行っている創造行為を追った作品を展示する。



11

下道基行《ははのふた》2012年 作家蔵

高田安規子・政子

ともに1978年東京都生まれ。双子の姉妹によるアーティストユニット。暮らしのなかにある小さな日用品や衣服に、彫りや刺繍といった手を加えることで、スケールの全く異なるモチーフや風景を作り出す作品には、詩的な喚起力が宿っている。本展では室内に見立てた展示室に作品を配置し、コロナ禍で外出できない閉塞感を暗示しつつも、日常と非日常のあわいにあるグラデーションや、物理的に離れていても外の世界とのつながりを感じさせるような空間を作り出す。



12

高田安規子・政子《編み針》2019年
作家蔵 撮影：長塚秀人

竹村京

1975年東京都生まれ。傷ついたり壊れてしまった日用品を半透明の布に包み、破損した箇所に刺繍を施す「修復シリーズ」や、ドローイングや写真の前面に刺繍された白布を重ね合わせたインスタレーションなど、記憶や風景といった忘れられていくものや、変化していくもの、日用品のように壊れてしまうものを縫うという行為によってとどめることを試みている。本展では、蛍光色に光るシルク糸を用いた修復シリーズの作品を出品するとともに、期間中に不定期で作品を修復する様子を公開する。



13

竹村京《修復された T.家の電球》ヨコハマトリエンナーレ 2020、パフォーマンス風景
撮影：小林由喜伸 Courtesy of Taka Ishii Gallery

関連プログラム

4月1日以降に金沢21世紀美術館ウェブサイトにて公開予定

展覧会 公式カタログ

『日常のあわい』

展示風景を収録したカタログを販売します。

デザイン：大原大次郎

発行元：青幻舎

発売日：2021年6月（予定）

本体価格：2,500円（予価）

広報用画像

画像1～13を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。

https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

【使用条件】

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。